表 2　病日別冠動脈異常所見出現頻度

治療群＼病日	入院時（2～18病日）	30 病日	60 病日
Aspirin 群	16/100	22/100	11/100
Flurbiprofen 群	13/104	40/104	27/103
Prednisolone Dipyridamole 群	14/101	27/101	20/ 99

冠動脈病変をチェックする。

もし経過観察中にどうしても他の抗炎症剤，抗血栓剤等を使用せざるを得ない場合には，コントローラーに連絡し，登録を取り消すことができる。

〔結　果〕

対象：昭和56年7月から昭和57年10月までに登録された症例は345例であった。このうち登録取り消し例が39例，調査表未回収例が1例あり，残り305例を研究対象とした。この305例中男児は166例で男女比は 1.2：1，また2歳未満の症例が213例で69.8％を占めていた。服用薬剤別対象数は，A群100例，F群104例，P群101例であった。

治療成績：冠動脈異常所見の有無は，原則として超音波心断層エコーで判定した。まず入院後できるだけ速やかに実施し，これを入院時所見とした。これは約90％の症例で10病日以内に実施されていた。その後30病日，60病日の時点で集計した。その結果を表2に示した。30病日，60病日とも異常所見出現頻度は，A群が一番低く，次いでP群，F群の順であった。またいずれの治療群でも，異常所見出現頻度は30病日が最高であり，60病日までに正常化するものがかなり見られた。さらに3群のうち，A群に30病日以降正常化するものが多い傾向があった。

〔結　語〕

(1) 川崎病の冠動脈病変を確実に予防できる薬剤は現在のところないといわざるを得ない。

今回の3治療群の内では，aspirin 群，prednisolone＋dipyridamole 群，flurbiprofen 群の順で冠動脈異常所見出現の頻度が低い傾向にあった。

学童心臓検診における川崎病心血管後遺症の発見の問題点
——急性期冠動脈造影で異常があり学童期まで follow up した例との比較——

久留米大学小児科　加藤裕久
井上治
一ノ瀬英世
江藤仁治
平田克彦
武智哲久
鈴木和重
松永伸二
吉岡史夫
横地一興

〔研究目的〕

川崎病は川崎博士によって初めて報告されて以来15年になるが，年々増加の傾向にありその既往児は学齢期に達している。本疾患の心血管後遺症は心筋梗塞，突然死

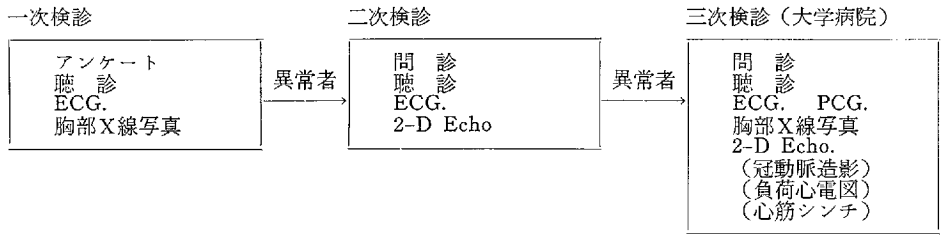

図 1　学童心臓検診における川崎病既往児の取り扱かい

の原因となるが，以前の症例は急性期に冠動脈の精査が充分行なわれておらず，無症候性の冠動脈異常が多数存在する事がわかり，実際に学校で突然死した症例が報告されている現在，学童心臓検診において川崎病の心血管後遺症をいかにして発見するかという事は重要な問題となっている。

表 1　学童心臓検診における川崎病

年　　度	検診者数	川崎病既往者	%
小学生		(冠動脈異常者)	
昭和51年	3,389	1 (1)	0.03
昭和52年	3,403	1 (0)	0.03
昭和53年	3,609	2 (0)	0.06
昭和54年	6,092	3 (0)	0.05
昭和55年	6,132	15 (1)	0.24
昭和56年	11,060	20 (1)	0.18
昭和57年	10,496	27 (4)	0.26
計	44,181	69 (6)	0.16 (0.01)
中学生 昭和56年～昭和57年	4,389	1 (1)	0.02
総　計	48,570	70 (7)	0.14 (0.01)

我々は昭和51年度より学童心臓検診において，アンケートに川崎病の項目を設置し検診を行ない7名の心血管後遺症児を発見した。今回，急性期に血管造影で冠動脈異常が存在しかつ現在学齢期に達している者の検診を行ない，この所見と学童心臓検診における所見とを比較検討し，学童心臓検診における川崎病心血管後遺症の評価について考察した。

〔対　　象〕

〔A群〕（学童心臓検診群）昭和51年度より昭和57年度までの小学1年生44,181名，昭和56年度，昭和57年度中学2年生4,389名。〔B群〕（血管造影施行群）急性期に血管造影を施行し，現在学齢期に達している217名のうち冠動脈異常を有していた38名。

〔方　　法〕

〔A群〕図1に示すごとく，アンケートにて川崎病既往者は二次検診を行ない，昭和54年度以降は断層心エコー検査を施行，異常者はさらに三次検診を行った。

表 2　川崎病既往児の検診における異常所見

	Retrospective	Prospective	
	学童心臓検診 川崎病既往者 70例	急性期血管造影にて冠動脈異常者　38例	
		Regression　16例	Not regression 22例
聴診　僧帽弁閉鎖不全雑音	1	0	0
胸部レントゲン写真	1	0	4
安静時心電図	0	0	2
負荷心電図	旅行せず	1	3
断層心エコー図	7 (7)	3*(0)	19 (14)
以上より検診にて後遺症有りと評価された者	7 例	1 例	19 例

（　）動脈瘤を有した例
* 動脈壁のエコー輝度上昇のみを認めた例

〔B群〕 アンケート，聴診，胸部レントゲン写真（正面像，側面像），心電図（安静時，マスターダブル負荷），断層心エコー検査を行った。

〔結　果〕

〔A群〕 表1，2に示すごとく川崎病既往者は小学生69例，中学生1例であり昭和55年度以降急増している。冠動脈異常を有する者は小学生6例，中学生1例の計7例で既往者に対して10%であった。これら7例はすべて断層心エコー検査で冠動脈瘤の存在が確認され，1例は僧帽弁閉鎖不全雑音を有し，さらに1例は胸部レントゲン写真にて異常石灰化を有していた。心電図検査ではすべて正常であった。〔B群〕 表2のごとく38例中その後の血管造影にて完全に regression している者16例，異常所見を残している者22例である。前者16例中今回の検診にて異常所見を示した者は1例で，負荷心電図にてST 低下を認めた。断層心エコー検査にて動脈壁エコー輝度上昇を認めた者が3例存在していた。逆に後者22例中ほとんど異常を認めなかった者が3例存在した。その内1例は，軽度の動脈壁エコー輝度上昇は存在した。後者22例中4例に胸部レントゲン写真にて異常石灰化を認めた。心電図異常は4例で，安静時異常Q波2例，負荷後ST 低下2例，負荷後上室性期外収縮出現1例であり，いづれも高度の狭窄，閉塞病変を有する者である。断層心エコー検査にてはほぼ正常の所見しか得られなかった3例を除き，動脈瘤，動脈壁の不整，狭窄，動脈瘤内血栓，左室壁の動き不整の所見が得られた。聴診にて異常所見は認められなかった。

〔考　案〕

川病崎心血管後遺症児を学童心臓検診において発見する事の重要さは一般に認識されているが，その方法論に確立されたものはない。我々は後遺症を有している者を心臓検診のレベルとほぼ同様の方法で検診を行った。聴診では病的雑音を有する者はいなかったが，学童心臓検診にて僧帽弁閉鎖不全雑音を有する者が存在した事より，この様な雑音を有する者には，リウマチ熱のみならず川崎病の既往を問診する事は重要である。胸部レントゲン写真にて異常石灰化は正面像からはわかりにくく，低電圧による2方向撮影が勧められる。心電図異常は高度の狭窄，閉塞病変を有する者以外，動脈瘤のみでは出現せず Critical な所見と考えられる。ただ今回の検診で完全に regression している1例に ST 低下が見られたが，この症例に関しては今後検索してゆく予定である。断層心エコー検査はA群において異常者のすべてに positive に所見が出ており，B群においても22例中19例に異常が見られ，最も重要でかつ必須の検査である。ただ今回の検索において何ら所見なく，しかし冠動脈病変を有する者が存在した事は重要であり，これらをも発見する為に今後一層の努力が必要である。

川崎病冠動脈病変の再造影による検討

東京女子医大第二病院小児科　草川三治
塩田康夫
多田羅勝義
李慶英
東京女子医大第二病院中検　木口博之

〔目　的〕

川崎病罹患児の10～20%に冠動脈瘤がみられる事が明らかにされているが，それら動脈瘤が年余を経た場合どのように変化していくかについてはまだ充分明らかにされていない。そこで当科での冠動脈病変を有する児について再造影を行った結果につき報告する。

〔対　象〕

1973年5月より1982年12月までの9年7ヵ月の間に当科で冠動脈造影を行った312例(男子199名，女子113名)のうち冠動脈瘤，拡大，狭窄，閉塞所見を有していたものは56例（17.9%）であった。これら有所見者のうち再造影を行った23例（男子16名，女子7名）につき検討し

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔研究目的〕

川崎病は川崎博士によって初めて報告されて以来15年になるが,年々増加の傾向にありその既往児は学齢期に達している。本疾患の心血管後遺症は心筋梗塞,突然死の原因となるが,以前の症例は急性期に冠動脈の精査が充分行なわれておらず,無症候性の冠動脈異常が多数存在する事がわかり,実際に学校で突然死した症例が報告されている現在,学童心臓検診において川崎病の心血管後遺症をいかにして発見するかという事は重要な問題となっている。

我々は昭和51年度より学童心臓検診において,アンケートに川崎病の項目を設置し検診を行ない7名の心血管後遺症児を発見した。今回,急性期に血管造影で冠動脈異常が存在しかつ現在学齢期に達している者の検診を行ない,この所見と学童心臓検診における所見とを比較検討し,学童心臓検診における川崎病心血管後遺症の評価について考察した。